TADOKU JUNIOR　イソップ物語　★★★☆☆ ふつう　362語

The Town Mouse and the Country Mouse

町のネズミといなかのネズミ

Aesop（1919年の本）　**原文そのまま**　朗読：Frances Brown

人の声の朗読
を聞く・Web版

どんなおはなし？　町のネズミにさそわれて、にぎやかな町へ出かけたいなかのネズミ。ごちそうはたくさんあるけれど、そこには……。



A Town Mouse once visited a relative who lived in the country. For lunch the Country Mouse served wheat stalks, roots, and acorns, with a dash of cold water for drink. The Town Mouse ate very sparingly, nibbling a little of this and a little of that, and by her manner making it very plain that she ate the simple food only to be polite.

After the meal the friends had a long talk, or rather the Town Mouse talked about her life in the city while the Country Mouse listened. They then went to bed in a cozy nest in the hedgerow and slept in quiet and comfort until morning. In her sleep the Country Mouse dreamed she was a Town Mouse with all the luxuries and delights of city life that her friend had described for her. So the next day when the Town Mouse asked the Country Mouse to go home with her to the city, she gladly said yes.

When they reached the mansion in which the Town Mouse lived, they found on the table in the dining room the leavings of a very fine banquet. There were sweetmeats and jellies, pastries, delicious cheeses, indeed, the most tempting foods that a Mouse can imagine. But just as the Country Mouse was about to nibble a dainty bit of pastry, she heard a Cat mew loudly and scratch at the door. In great fear the Mice scurried to a hiding place, where they lay quite still for a long time, hardly daring to breathe. When at last they ventured back to the feast, the door opened suddenly and in came the servants to clear the table, followed by the House Dog.

The Country Mouse stopped in the Town Mouse's den only long enough to pick up her carpet bag and umbrella.

"You may have luxuries and dainties that I have not," she said as she hurried away, "but I prefer my plain food and simple life in the country with the peace and security that go with it."

Poverty with security is better than plenty in the midst of fear and uncertainty.



THE TOWN MOUSE AND THE COUNTRY MOUSE

あるとき、町のネズミが、いなかにすんでいるしんせきをたずねました。いなかのネズミは、お昼ごはんに、麦のくきや草の根っこやドングリを出し、のみものには、つめたい水を少しそえました。町のネズミは、あれを少し、これを少しとかじるだけで、ほんの少ししか食べませんでした。そのようすから、そまつな食べものを、しつれいにならないように食べているだけだということが、はっきりわかりました。

ごはんのあと、2ひきは長いあいだ話をしました。というより、町のネズミが町でのくらしを話し、いなかのネズミはそれを聞いていました。それから2ひきは、生けがきの中のあたたかいすでねむり、朝までしずかにぐっすりねむりました。ねむっているあいだ、いなかのネズミは、自分が町のネズミになって、友だちが話してくれたぜいたくで楽しい町のくらしをしているゆめを見ました。だから、つぎの日、町のネズミが「いっしょに町へ来ない？」とさそうと、いなかのネズミはよろこんで「行く」と答えました。

町のネズミがすんでいる大きなおやしきに着くと、食どうのテーブルの上に、とてもりっぱなごちそうののこりがありました。おかしやゼリー、パイ、おいしいチーズなど、ネズミが思いつくかぎりの、いちばんおいしそうな食べものがならんでいました。ところが、いなかのネズミがおいしそうなパイをひとかじりしようとしたちょうどそのとき、ネコが大きな声でニャーと鳴いて、戸をガリガリひっかく音が聞こえました。ネズミたちはとてもこわくなって、かくれ場所へにげこみました。そして、長いあいだ、いきをするのもこわくて、じっとしていました。やっとのことでごちそうのところへもどると、とつぜん戸があいて、めしつかいたちがテーブルをかたづけに入ってきました。そのあとから、家の犬もついてきました。

いなかのネズミは、町のネズミのすあなに、自分のかばんとかさを取りにいくあいだだけ立ちよりました。

「あなたには、わたしにないぜいたくやごちそうがあるかもしれない」と、いなかのネズミはいそいで帰りながら言いました。「でも、わたしは、いなかのそまつな食べものと、しずかで安心なくらしのほうがいいわ。」

びくびくしながらたくさんのものにかこまれるより、まずしくても安心してくらすほうがよいのです。

町のネズミといなかのネズミ

たんご と クイズ 町のネズミといなかのネズミ

acorns ドングリ	**table** テーブル	**cheeses** チーズ
Cat ネコ	**door** 戸、ドア	**Dog** 犬
umbrella かさ	**country** いなか	

Q1 いなかのネズミが出したお昼ごはんにないものは？

① ドングリ　② チーズ　③ 草の根っこ

Q2 ごちそうを食べようとしたとき、何がおきた？

① ネコが鳴いて戸をひっかいた　② 雨がふってきた　③ テーブルがたおれた

Q3 いなかのネズミは、さいごにどうした？

① 町にすむことにした　② 町のネズミをいなかにまねいた　③ いそいでいなかに帰った

こたえ

Q1 ②　いなかのごはんは、麦のくき、草の根っこ、ドングリと水でした。チーズは町のごちそうです。

Q2 ①　ネコがニャーと鳴いて、戸をガリガリひっかく音がしたので、2ひきはあわててかくれ場所へにげこみました。

Q3 ③　かばんとかさを取って、いそいで帰りました。しずかで安心ないなかのくらしのほうがいいと思ったのです。

原田英語の多読ベストジュニア

本物の英語の絵本 1,000話以上を、原文・人の声の朗読・和訳つきで。ゲーム・なぞなぞも。ぜんぶ無料・登録なし。

haradaeigo.com/tadokubestjr/

出典　英文：原文そのまま（1語も書きかえていません）。Project Gutenberg 電子書籍 #19994（Aesop、1919年）。パブリックドメイン。
挿絵：Milo Winter（同じ本の初版の挿絵。パブリックドメイン）
朗読（Web版）：Frances Brown（LibriVox のボランティア。パブリックドメイン）
和訳・クイズ：AIと人が作成。AIは３重チェック。人の目でも順次確認しています。